

13. 前思春期から思春期にかけて変化する親子の愛着 関係と自己イメージ及びその関連要因について

(代表) 福田汐里 菱川匡子 二宮やよい 花木寿子 西村佑紀

(医学部保健学科看護学専攻 3年)

向智子 高嶋千恵美 垣内瞳 荒井秋恵 奥野友紀子 黒木美江

(医学部保健学科看護学専攻 4年)

指導教員

木村留美子 (医学系研究科保健学専攻 教授)

津田 朗子 (医学系研究科保健学専攻 助教)

1. 研究の背景と目的

幼少期に親からの養育によって形成される親子の愛着関係は、子どもの自己に対するイメージの形成に影響を及ぼし、将来の対人関係の基礎となる重要なものである^{1,2)}。しかし、前思春期から思春期においては、発達に伴う思考の質的变化が大きくみられ、親の価値観に影響を受けた生き方から徐々に自立し、親子の関係にも変化が生じ、自己を再構築していく重要な時期である。また、第二次性徴の出現などにより情緒は不安定となり、大人から見れば扱いにくい反抗期と呼ばれる時期にあたり、さまざまな問題がみられる段階である。

そこで、本研究では、前思春期から思春期の発達的变化を小学3年生から6年生を対象に親に対する愛着関係の変化や自己イメージの変化、社会性の発達、およびストレスとの関係から調査したので報告する。

2. 研究方法

1) 調査対象

対象は金沢市内の公立小学校(3校)に通う3~6年生の児童445名と担任教師15名である。有効回答数は、子ども394名(88.5%)、担任教師15名(100%)であった。

2) 調査期間

2005年9月26日~10月28日

3) 調査方法

調査は、同意の得られた子どもと担任教師に対して自記式質問紙による調査を実施した。子どもに対しては、親に対するイメージと自己に対するイメージを調査し、連続5日間の生活習慣調査と唾液採取を行った。担任教師に対しては、子どもの学校で

の対人関係など社会性の発達に関する調査を実施した。

4) 調査内容

(1) 自己イメージと親へのイメージ

自己イメージと親へのイメージは文章完成法にて調査し、自己イメージについては「私は自分のことが・・・」に続く文章を、親へのイメージについては「私のお母さんは・・・」に続く文章を用い、その回答を「大好き」「大切」など肯定的な表現をした者をポジティブ群、「嫌い」「いやだ」など否定的な表現をした者をネガティブ群、イメージを描くことができなかった者を無記入群として分類した。

(2) 唾液採取

コルチゾールを採取するために1日2回の唾液採取を行い、唾液中のコルチゾールを分離抽出した後にコルチゾールリズムの日内変動の良否を判定した。

(3) 社会性の評価

子どもの社会性の評価は担任教師に依頼し、改訂版社会制スキル尺度 (SSRS) による他者評価を依頼し、子どもの学校での行動や態度について調査を行なった。評価基準は“全くみられない”から“非常によくみられる”の5段階(1～5点)である。

3. 結果

1) 前思春期から思春期の子どものおこころの変化

(1) 母親に対するイメージと自己に対するイメージ (図1、図2)

母親に対するイメージは、男女の間に有意差はみられなかったが、3・4年生の女子が母親に対するイメージのポジティブ群の割合が最も多かった。

自己に対するイメージは、男女の間に有意差はみられなかったが、3・4年生の女子が自己に対するイメージのポジティブ群の割合が最も多く、ネガティブ群は5・6年生の女子に最も多かった。



図1. 母親に対するイメージ



図2. 自己に対するイメージ

(2) 母親へのイメージと自己イメージとの関連 (図3)

母親へのイメージと自己イメージとの関連については、対象が少なかったため、子どもが抱いているイメージのポジティブ群を肯定群とし、ネガティブ群と無記入群を合わせて非肯定群として分類し、その関連を確認した。肯定群と非肯定群の間にはいずれの学年においても有意差がみられ、母親に対するイメージが肯定的な子どもは自己イメージも肯定的であり、母親へのイメージが非肯定的な子どもは自己イメージも非肯定的であった。



図3. 母親へのイメージと自己イメージ

2) 社会性とコルチゾールリズムとの関連 (図4・5)

担任によって評価された子どもの社会性の調査を因子分析し5因子を抽出した。社会性因子を「協調性」と「ルール遵守」と命名し、この2因子は高得点であるほど集団における望ましい行動を表すものである。問題行動因子としては「攻撃性」「孤立性」「注意散漫」と命名し得点が高いほど衝動的行動や反社会的行動が高いことを表すものである。この5因子とコルチゾールとの関係を調査した。

コルチゾールは副腎皮質ホルモンであり、深夜から朝にかけて上昇し、夕方にかけて濃度が減少するという日内変動を示すことが知られている。また、コルチゾールは血糖値を維持する役割も果たしており、朝にコルチゾール濃度が上昇することで子ども達は学校での日中の活動が保障される。さらにコルチゾールは別名ストレスホルモンとも呼ばれストレスがかかることで値が上昇する。したがって、朝から夕方にかけて下降しない場合には学校での過ごし方に問題があるなどのストレスの指標となる。そこで、子どものコルチゾールリズムを判定するにあたっては、朝から夕方にかけてコルチゾール濃度が減少しているものを良好群とし、変化がみられないものや増加しているものを不良群の2群に分類して教師による子どもの社会性の発達との関連を確認した。しかし、図4・5に示すように社会性とコルチゾールの値との間に関連は見られなかった。

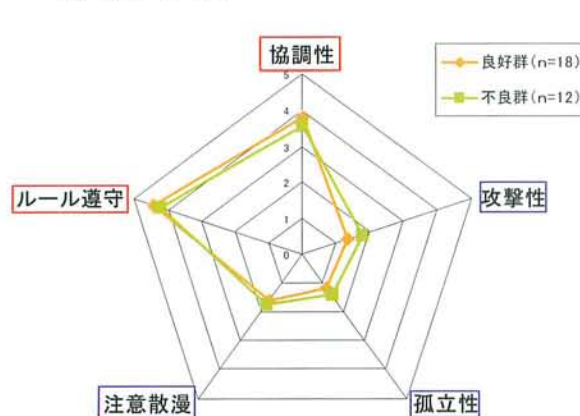


図4. 社会性とコルチゾールリズム(3・4年生)

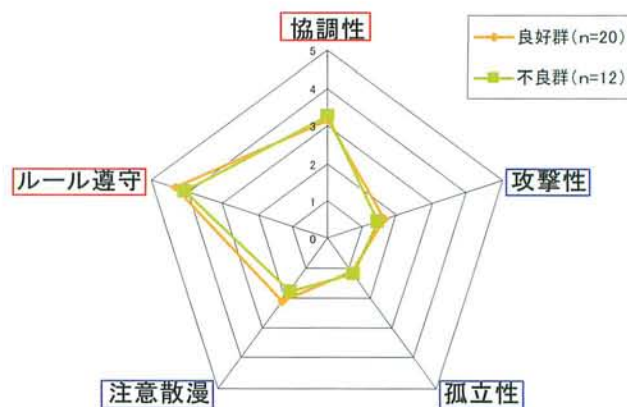


図5. 社会性とコルチゾールリズム(5・6年生)

3) 自己イメージとコルチゾールリズムとの関係 (図6)

自己イメージとコルチゾールリズムについては対象数が少なく有意差は見られなかったが、コルチゾールリズム良好群の子どもに自己イメージがポジティブな子どもの割合が多く、コルチゾール不良群に自己イメージが無記入やネガティブの割合が高くなっていった。



図6. 自己イメージとコルチゾールリズム

4. 考察

子ども達は、前思春期から思春期にかけて母親へのイメージや自己に対するイメージは変化し、学年が高くなるにつれて母親へのイメージも自己イメージも描くことができない、あるいは否定的に捉える子どもが増加していた。このような子どもの変化こそが思春期にある子どもの心の変化を表すもので、大人になる前段階で親の価値観の中で生きてきた自分を見直す自己のアイデンティティの確立に向けた試行錯誤の状態と考えられ、特に自分自身に対する評価が低くなるのが特徴である。したがって、この時期にある子どもたちは自信がなく、周囲に居る大人に対しても信頼感を抱くことが困難な状況にあり、他者の声に耳を貸すゆとりも無い状況にあることが考えられる。

コルチゾールリズムは、これまでの幼児を対象とした研究³⁾においては、食事の有無や睡眠時間などの生活習慣や社会性の発達との間に関連がみられた。しかし、今回の小学生を対象とした研究では幼児期のような結果は見出せなかった。その理由としては、コルチゾールを採取できた子どもの数が少ないことによる対象数の問題があげられるが、この点に関しては今後対象数を増やし、更なる検討を行うことが必要であると考えられる。しかし、有意差はみられなかったものの、コルチゾールリズム良好群には自己イメージポジティブ群が多く、コルチゾールリズム不良群には自己イメージネガティブ群・無記入群の子どもが多くみられていることから子どもの心の乱れはコルチゾールリズムの乱れに影響を及ぼしていることは否めない。

前思春期から思春期へと向かう子ども達は大人へと向かう移行期の中にあり、多くのストレスを抱えながら学校生活を送っている。そして、この時期の子どもたちはそれまでに培われてきた親との情緒的なつながりから一人の人間として生きていくため

の力を得るために、一時期肯定的な自己像を見失う状況にある。しかし、この時期の発達課題を乗り越えていくためには、自己を見つめなおす時間は重要であり、これには、それまでに培われてきた強い親子の関係（絆）と、それを支え、見守る周囲の大人の支援のあることを子ども自身が自覚できることが重要である。

引用参考文献

- 1) Bowlby, J. : Attachment and loss: Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books, 1969.
- 2) 二木武：ボウルビィ 母と子のアタッチメント 心の安全基地。医歯薬出版株式会社, 2002.
- 3) 津田朗子, 木村礼, 鮫島道和他：子どもの生活習慣と生体リズム(第1報)－体温リズムとコルチゾールリズムへの影響。金沢大学つま保健学会誌, 30(1) : 1-9 , 2006.
- 4) 木村留美子, 竹俣由美子：児童の親子関係が発達に及ぼす影響について第2報－自己肯定感との関連－。第5回小児保健学会誌 : 608-609 , 2006 .
- 5) 西村良二：思春期中期・後期における性的役割期待と自己意識の関連についての検討。広島医学, 52(8) : 751-755 , 1999 .
- 6) 西本幹子：青年期における父親・母親に対する愛着関係と対人コンピテンスに関する研究。追手門学院大学心理学論集, 9:1-9, 2001.
- 7) 尾木直樹：思春期の危機をどう見るか。岩波新書, 2006.
- 8) 中村伸枝, 石川紀子, 武田淳子他：学童の親がとらえた子どもの生活習慣と生活習慣が改善できない理由－運動習慣・食習慣・生活規律に焦点を当てて－。千葉大学看護学部紀要, 23:15-22 , 2001.